

《ロンドンからのたより(両親宛)》 ·1972a  
～オペア(aupair)見聞録:その1～



1972年6月16日

お父さま&お母さまへ

朝の目覚めに、窓越しに裏庭からの柔らかな陽射しと何やらかぐわしい薔薇の花の香りに迎えられるのがいかにも異国情緒に溢れて、ああ、ほんとにここはイギリスなのだー！との感慨を日々深めております。

ヒースロー空港では入国審査に結構手間取ったけど、『オペア語学留学』の仲間の女の子と別れの挨拶も忙しく、わざわざ迎えに来てくれていた私のホストマザーの Mrs.J. 夫人に引き合わされて、どうにか無事にこちらに到着。庭付き一軒家で、門構えもそこそこに立派。ご主人の Dr.J は小児科医。パキスタン系でもまずは成功している部類でしょう。部屋数も充分適当にあり、私の個室も狭くてもこじんまりとした安らげるスペースです。こちらのお宅で私がお相手することになる一人娘のレベッカ(6歳)には到着時に早速彼女の寝床に赴き、‘はじめまして’の挨拶をしまして、日本からもおみやげものを手渡したり・・・。母親譲りの、ちょっと気の強そうな、おしゃまな女の子。うまく付き合えるといいんだけど・・・。どっちもまだお互いを眺めやっているところ。出だしの感触は悪くありません。

とにかく、渡英にあたり、いずれは専門職の研修コースを狙うにしても、事前に語学カアップは勿論のこと、児童臨床に携わる上で英国の家庭事情査察は必須であろうと思ひ、取り敢えずオペア留学制度を活用してイギリス人家庭に住み込んだというわけでしたが、やはり

この選択は間違いなかったと安堵しました。どうやら AWL (仲介エージェント) がうまくホストファミリーのマッチングをしてくれた模様です。ね。

Dr.&Mrs.J.さん一家は奥さんの郷里のイタリアへ休暇とやらで旅行に出かけました。レベッカも連れていきましたので、しばらく随分とのんびり出来るわけです。Mrs.J.夫人が居残りの私を心配して、マーガレットという職場の同僚の女の人を昨晚連れてこられました。【Alitaria】というイタリア航空にお勤めなのです。生粋のイギリス系らしい彼女は私と同じぐらいの年齢で、可愛い人です。1週間ほど二人で留守番をすることになりました。マーガレットはとても可愛い車を持っていて、さっきそれで J.さんたち一家を空港へ見送りにゆきました。玄関口でホストマザーの Dr.J.が私に「いい子でいなさいね」(直訳すると)とおっしゃったので、私はおかしうて笑いました。その時、顔を赤らめたいのですが、日本の女の子はよく顔を赤らめると、マーガレットが可笑しがるのでした。だって25歳にもなっている私に、「いい子でいなさいね」って云う Dr.J.の感覚がちょっとずれ過ぎていると思ったもので・・・。でも、もはや私を‘家族’扱ってくださってるわけで、有り難いような、なんだか面映い気分でもありました。

大きな冷蔵(凍)庫が幾つもあって、食べ物にワンサと入っているので、彼らが不在でもこの一週間大丈夫生きてゆけそうだと安堵したのです。英国の食べ物事情は一般に芳しくありませんから、どうなることやらと内心不安を抱いてたのですが、嬉しくも予想が裏切られ、ラッキーです。ハム類、肉類、それに野菜がワンサとあるので、さてどんな風に料理したらいいものやらと、マーガレットと一緒に冷蔵(凍)庫の中をあれこれ掻き回しては満足してるところです。

ごく順調に語学学校での登録はすでに済ませました。先生はヘッデルデンという方で、素晴らしい美人です。かなり年輩でしょうが、本当に素敵な女性で、とつても解りやすい英語で美しく話されます。Mrs.J.夫人の推薦で彼女のクラスに入ったのですが、本当に幸せって感じます。正真正銘の生粋の英国のレディと云った印象なの。とにかく素敵なんです。

さて、ホストマザーの Mrs.J.夫人は背の高い痩せ型のしっかりした顔立ちで、ひどくイタリア風の癖のある英語を話します。(マーガレットが、彼女はイタリア人だって教えてくれました。) テキパキしているのでもいいのですが、優雅というわけではありません。レベッカを叱る時はものすごい剣幕でお尻を叩くので、気の優しい私はびっくりします。この前、マッサージできる？と聞かれて、ハイって言ったら、パツと服を脱いで、側に Dr.J. がいたのですが、私に背を向けたのでびっくりして、可笑しくなっちゃいました。(マッサージしてやると、すごく気持ち良かったって。。) それから、先日、こまかいお金を持っていない時、汽車賃をくださいました。あとで返そうとしたら、<そんなのいいのよ、バカね>って笑って、私のお尻を軽く叩くのでした。何かの折に彼女はよくそんな動作をするのですが、自分は大人だって意識が私にあるせいか、戸惑ってしまうのです。でも Mrs.J.夫人は気さくない人です。

ホストファーザーの Dr.J.はハンサムです。背は高くって、とても優しいいい人なのです。時折小さな子どもに教えるように、私に親切に教えてくれます。朗らかでよく笑います。パキスタンから手紙が来てましたから、きっとそちらの人らしいです。(マーガレットが、彼はビルマ人だって、教えてくれました。でもどうかな?) 彼が若くてハンサムなので、私は嬉しいです。頭が禿げて

いて、デブっていて、眼がショボショボしている人にダンスを教えてもらおうとは絶対に思わないわね。それに肌が白っぽいじゃないからいいのです。Dr.J.は焦げ茶色です。ロンドンでは黒人もよくいますが、大抵の人はすごく綺麗です。いろんな国から来ています。私の英語のクラスは外国人向けで、受講生らがそれぞれどこから来ているのか、出身地は今のところ解らないけど、白は白なりに黒は黒なりに綺麗だということを発見できたのは嬉しいことです。

客間でこのレターを書いています。日当たりのいい、家具・調度品の素敵ないい部屋です。さっき音楽を聴きながら独りのんびりAWL(エージェンシー)から来た便りを読んでいたら、ぼろぼろと突然に涙が溢れてきました。(緊張がほぐれたのかな?)日本を出立する前に或る方から<(異国暮らしが辛くて)泣きたい時は、大いに泣くように・・>と言われてたので、泣きました。実はもう既に、まるで‘歌を忘れたカナリア’の心境なの。英語をしゃべり、英語を聞き、英語のものを読んでいると、日本のことがまるで関係ないのです。実際、私は気持ちよく暮らしていますので、まるで異国って感じがしないのですが。。でも私が外国人なので、路で通りすがりの人たちが親切にお声を掛けてくださいますし、そんな時は、私の方も、外国人ですって態度で、あちらの親切を喜んで受けるのです。でも‘歌を忘れたカナリア’になりそうな気持ちが折々にふっと頭をもたげて、慰めにレベッカ相手に折り紙やお手玉や活け花を教えたりしていました。私はますます日本鼻頂になります。じゃあいずれ又近々に便りします。さようなら 千鶴子より

(住所: ※※ Cromwell Road, Teddington, Middlesex, TW11, England)

.....



1972年6月20日

お父さま&お母さまへ

マーガレットと私は、楽しく暮らしています。彼女はとても気持ちのいい人です。私よりも2つ年上だっというけど、21や22ぐらいにみえる可愛らしい人なのです。恋人がパイロットなのですって。それが一昨日、ヒースロー空港ですごい惨事があったのです。118名もの人が亡くなったって。飛行機がなんと離陸直後に墜ちたらしいのです。夕方6時前でマーガレットは勤務中だったのですが、それを聞いた時、ヒヤとしたんですって。でも彼は無事で、実は目下ストライキ中なのです。殆どのパイロットが、ハイジャックとか物騒なことが頻発しているせいもあり、会社側の危機管理対策に強く不満を持っていて、それでストライキなんだそうです。よく解りませんが・・・。

私の部屋から飛行機が飛んでいるのがよく見えますけど。ロンドン迄の空路を振り返り、今更ながら本当によくまあ無事だったなって思うのです。テヘラン空港で給油のため寄ったのですが、機内で私の隣の座席の女性がトイレから真っ青になって戻ってきて、トイレから出たとき腕を掴まれたと言うの。それはあちらの整備工なのでした。私が失礼だって憤慨したら、そんなじゃなくて、もっと大変なことが起こっているのじゃないかって顔を強張らせて、彼女頻りにやきもきするのです。腕を掴まれたとき、ステewardessは全員無言で立っていたんですって。それに整備工たちがゾロゾロ室内を眺めて(物色しているし。イランの国境辺りで戦争があるらしいとか聞くと、窓の外をみると、次々に軍機が飛び立ってゆくし。異様に緊張した空気感のわりには機内アナウンスが全然無いし、本当にいくらぼんやりさんの私でも変だなと一瞬思ったのです。

テヘラン迄の間、インドとパキスタンの戦いで進路を変更していましたし。でも戦いに普通の旅客機を巻き込むことはないからって、彼女を安心させたのです。まあ、ハイジャックよりは、戦争の方が直接危害はないと思ったのです。ヤキモチしたのも終わって、飛行機は無事飛び立ちました。機長その他乗務員スタッフはひどく落ち着いた笑顔をしているので、結局何があったのか解りませんでした。でも「よど号ハイジャック事件」とか、各地で勃発する戦争を思って、戦争経験のない私は本当にイヤなものだと実感したのでした。それに不穏な空気は察したとしても、ぼんやりとしか英語が聞き取れないので細かい情報が得られず、歯がゆい限りなのです。昨日またもう一つ、どうやら飛行機事故があったようなのですけれど・・・。

そうしたことはともかく、昨日偶々独り居間でテレビを観ててびっくりでした。『サムライの精神』という番組があったの。弓、刀、薙刀、空手、合気道など、もうすごい、すごい！の一語に尽きるものだったの。恐ろしい精神力だっと思って・・・。琴や尺八の奏でるなかで、アナウンサーが英語で解説するんだけど。つまりは自分の体と心をマスターするのが全ての狙いだっ。合気道って知らなかったけど。一人の師範格の先生に掛かっていった3人の大の男がころころと転がされて、その先生の顔は微塵も変化がないのよ。私ならもうへたばっちゃうのに・・・。手に汗を握る番組でした。マーガレットが夜勤で側にいなかったのが残念です。誰彼を捉まえて「見て、見て！」って言いたい衝動を抑えられませんでした。日本人であるってことは、全世界を眺めわたしでも特殊であり、素晴らしいものを持っている人種なんだって改めて誇りを持ってたという次第なのです。

ところで、昨日マーガレットが友達のサリーと一緒に、私を『ウィンザー城』へ観光に連れて行ってくれました。その日は特別な儀式があるらしくって、おそらくエリザベス女王も滞在されておいでらしく、城周辺は物凄い人ばかりでした。城というより要塞みたいな、いかめしい重厚な佇まいにやはり威圧されそうになりました。観光客の人混みに揉まれながら、防壁沿いに城内への入り口へと続く石畳を歩みながら、「自分が何人であれ、何であれ、誇りをもってゆくべきだ」って胸のうちに一人呟いていたのです。

実にいろいろな様々な人たちが忙しく私の傍らを通りすぎてゆき、よくよく観察すると実に面白いったらないといった具合でした。素敵な帽子をかぶったエレガントな年老いたご婦人やら山高帽とモーニングを着た背の高い銀髪の老紳士やら、英国の上流階層の人たちもいました。私たちのような平均的な庶民の女の子もたくさんいました。後で城の外に出て、お土産物やの建ち並ぶチャーチストリートで3人揃ってあちこち安いセーターを物色して歩いたのです。マーガレットとサリーが真剣になって店先でセーターを掻き回しているのを眺めながら、どこでも女の子は変わらないなと、一瞬可笑しく思うのでした。

その前に見た『ウィンザー城』の衛兵さんたちのおかしかったこと！すごく背が高く、衛兵は2～4時間の間まったくの直立不動なの。通行人には一瞥もくれず、勿論のこと顔を崩さず笑いもせず、眼を真っ直ぐ前にして立っていないければなりません。実に格好いいんだけど、衛兵交替式の折に号令掛けたりしているのをみたら、なるほど確かに大英帝国の威光の片鱗を感じさせるのでした。よく言っていることが解んないけど。<おまえたちは大英帝国の兵士であり、ウィンザー城の衛兵であるのだ。解ったか？！

>って調子で、それにまた凄い声で吼えんばかりに返答するのです。びっくりさせられます。

嬉しいことが一つあったの。マーガレットのご自宅に立ち寄ったのです。ごく普通の(つまりは労働者階級で)慎ましくもぬくもりのあるお住まいでした。実直そうな62歳のお父様はBA(英国航空)にお勤めとか。柔和な物腰でとってもあたたかく歓迎してくださいました。60歳のお母様は本当にいかにもお母さんらしいってお方で、<あまり働くな、体を大事にしなさい・・・>っておっしゃって、シワシワの柔らかい手で包み込むようにして私の手を握ってくださいました。感激！ちょっとした日本のものをプレゼントしました。美しいご縁と親切な人々に出逢えて私は幸せでいます。

いずれ又。さよなら 千鶴子より



1972年6月24日

お父さま&お母さまへ

今日初めて近くのスーパーマーケットを訪れ、買い物をしました。ものすごい量の食料品にびっくりしました。その殆どが輸入品らしいのですから驚きです。自国のものはちゃんと「メイド・イン・イングランド」と書いてあるのですが、それは全商品の僅か1%もないぐらいです。缶詰類、ビン類が多く、さすが加工品の種類と量にはまったく驚かされます。

アイリンという女性が昨晚から来ています。この方も Mrs.J.夫人の職場の同僚です。今日 Dr.J.さん一家を空港へ車で迎えにゆくの。それで二人で、朝早く買い物がたら、車で繁華街へと繰り出したのです。彼女はプレゼントにもらったハンドバックに合う靴を探しました。

6, 7軒回ったのに全然見つかりません。私は、デパートでスカートとセーターと靴下を買いました。自分のサイズが解らず、アイリンがいろいろと面倒をみてくれました。

アイリンは20歳で結婚したそうです。けれど若すぎたって。今では指輪はしてません。さすが結婚の経験があるだけに、いろいろときめ細かく面倒をみてくれます。28歳ぐらいだろうと思います。彼女はすごく背が高いので、一緒に連れ立って歩くとき、私はうんと背筋を伸ばさなきゃならないので疲れます。彼女はヒールの低い靴を探してます。背が高すぎても低すぎても厄介なものです。

人がいっぱい集まる場所へ行くと、まさに人種の坩堝みたいで面白いです。デパートの中に足を踏み入れると、辺りをまるでマネキン人形がぞろぞろ歩いているような、変な錯覚を抱きます。奇妙奇天烈というか、あまり見慣れないシロモノというか、だから生きてるヒトという感じがなかなかしないわけなのです。40～50歳ぐらいのご婦人でも真っ赤と白の組み合わせのドレスを着てたり、人の目を気にしない、年相応なんて気にしないって、その着こなしからしてまるで自由な感覚で生きてるのが、結構見慣れたらなかなか愉快を覚えます。

それから、さすがこちらのデパートには帽子の品揃えが豊富で、素敵なのがワンサとありました。日本ではちょっと恥ずかしくて被れませんが、英国滞在中になら、どうやら帽子を取替え引き換え存分に今後楽しめそうです。いろいろと面白いことあるけど、その一つ、やっぱりファッションって興味あります。

この前の晩、マーガレットの友達が5人も来て、ちょっとしたパーティでドンチャン騒ぎなの

でした。私より年上の筈なのですが、皆てんでに個性的な装いを凝らしてすごく若やいで見えるのでした。皆どなたも海外旅行をしたことがあるようで、異邦人である私にも親切に声を掛けてくださいます。ペチャペチャ話し出すと私の耳は付いてゆけず、殆ど意味不明で聞き取れないのですが、まあまあ気楽にくつろいでいたのです。

Dr.J.さんたち一家の帰宅を待っているところです。準備万端整えて、バラの花を居間に飾りました。

それから、ロンドン到着時に空港のロビーで、Mrs.J.夫人が連れの他のオペア仲間の女の子たちに「うちにも遊びにいらっしやいね・・・」って愛想を振りまいたもので、皆が喜んじゃって、こんどの日曜日、何人か訪ねてくることになりました。まずまずいいファミリーに落ち着いたと云えましょう。結構愉しんでいますので、ご安心を！

じゃあ又ね。 さよなら

千鶴子より

◎追伸:

そもそもオペア(aupair)というのはフランス語で「平等・対等の立場」という意味なんだそうです。要は、ファミリーの一員として温かく迎え入れられるということが本筋で、就労ではなく、ホームステイなのです。従って、週ごとに Mrs.J.夫人から私に手渡される週5ポンドも、お給料ではなく、お小遣いなのです。子どもの世話やら家事手伝いへの謝礼として・・・。ただ大概のところオペアに支給されるお小遣いは週4ポンドが相場と聞いてますから、ここでの待遇はよい方と云えましょう。まあまあですよ。

.....



1992年6月28日

お父さま&お母さまへ

3度目のお便りいただきました。1番目の、間違っ別のお宅へ誤配された便りも無事に手許に届いてますから。どうぞご安心を！

今日はレベッカが一日休みなので、朝から一日中お相手です。朝、乳母車に人形を乗せて、近くを一緒に散歩して来ました。所々でお店やさんに寄ると言っって‘想像の遊び’をします。面白い子どもです。すごいおしゃべりです。初めはチンプンカンプンでしたが、私が解らないと解ったのか、最近ははっきりとゆっくり言ってくれます。自分で人形をつくったり、遊びを工夫したり、一人で庭でいるときなどベチャクチャと一人でしゃべったり、ごく普通の女の子です。だけど、あんなにしゃべれるのに、全然本が、教科書すらまともに読めません。字の綴りもめちゃくちゃです。綴りのテストの半分も出来ないのです。まったく私と正反対です。

でも面白いことに、私に英語を教えてくれるつもりで、それがすごい威張った口調でABCを言わせるやら、さらには算数の計算をやらせるやらで、たまらなく可笑しくなります。生徒役である私がもう止めたいと申出ても、もしくは、でもこの方が正しいと思っると訂正しても、先生役の彼女は頑として聞き入れません。そして、ああ言え、こう言えと執拗に命令するのです。結構私のためになることがあるので、そんな‘学校ごっこ’も一緒に愉しくやっってます。でも時折怒鳴るようなしゃべり方をするので、静かに言いなさいと一言注意しなければなりません。でも彼女の母親がしばしばそうなので、これはどうしようもないなと思ったりします。

それで今日、Mrs.J.夫人が私に一つ忠告してくれました。彼女曰く、英国の子どもは、日本の子どもと違っ。日本の子どもは、おとなしく振舞うことを要求されるが、英国の子どもは自分を主張し強い意思を持つことが要求される。だからレベッカが荒れてどうしようもない悪い子だったら、くおまえはいけない子だ。もう友だちと思わない>と、はっきり言ってやらねばならない。そして、放っておくのだと言っのです。確かに、扱っ方が全然違っます。

マーガレットが私にくMrs.J.夫人にはびくっさせられることがあるでしょ。だけど、あれはあの人の性格なのだから、気にしちやいけないよ。根はいい人なのだから・・・>と言ってくれました。確かに、マーガレットのお母さんは、まったくお母さんらしい優しい気のいいご婦人でした。やはり、人それぞれの性格に拠ると思っのです。Mrs.J.夫人は、すぐレベッカを可愛がるのだけど、ものすごくはっきりと強いることが多いのです。外国で異邦人として女が暮らすには、確かに人一倍の強い意志と性格を持たなきゃいけないのしょうが、なんだかどうもしっくりしないものを感じるの。やはりおとなしい日本の女性が懐かしく思ってなりません。なんっというか、静かで穏やかなのが好きです。やっぱり私、生来的に淡白なのかしら？でも Mrs.J.夫人はすごいエネルギーで、家事のやり方を見てると、ひじょうに勉強になります。料理も上手で、本当に恐ろしいぐらいテキパキとやっちゃうのです。そのスピードに付いてゆっくのが大変です。でも言われた通りにやっってます。しゃべり方が私には強すぎるけど。ひどいイタリア訛りがあるの。でも確かに、こだわらない、いい人なのです。では又。さよなら

千鶴子より

.....



1972年6月29日

お父さま&お母さまへ

今朝皆が出てしまった後、ちょっと疲れていたの、夕方皆が帰宅するまでと思いきり一息付いてうとうと居眠りしてたら、Dr.J.がお昼時に戻ってきて、家に閉じこもるのはよくないからどこかへ行ってきなさいと、近くの公園への道順を教えてくださいました。大急ぎで床みがきをやって出掛けました。本当のところは独りで部屋でぼんやり過ごしていたかったのですが・・・。

それが辿り着いてみると、樹木が立ち並ぶ広々とした緑地で、お天気もいいし気分がすっきりしてゆくようでした。鹿たちがあちこちにゆったりと群れていて、そのうちの何頭かがジューとこっちの動きを頻りに窺っているのが驚きました。『ブッシーパーク』といって、ハンプトンコート宮殿の北側に位置し、もとヘンリー八世の鹿狩場だったんですって。今でも鹿が放し飼いになっているわけ。それがまた、なんと一面の蕨(わらび)野なのです。ザアツと端から端までゆっくり歩いたら20分もかかろうかと思うほどの広さの蕨だらけの原っぱなのですから、もう驚いたり嬉しかったり・・・。気候がちょうど日本の春の感じで、蕨の新芽が随分たくさん生えているのです。お隣の南のおじさんが見たらどんなに悦ぶか、連れてきてあげたいとふと思って可笑しくなりました。そんなに遠く離れているって気がしないのに、実際は随分と離れているんですからね。蕨摘みしようかなと思ったけど、見るだけでもうくたびれちゃった。あまりに仰山なもので・・・。それに持って帰っても、どうしても料理なんて出来ないし、鹿たちががつついて思う存分あちこち食べ散らかすに任せて、私は諦めたの。その昔、この狩場で疾駆する馬に追い回されて、時には矢が飛んできたりで、難儀やったろうに、今ではその鹿たちが我が物

顔でのんびり気楽そうに蕨を食んでいるなんて実にいいなあって思いました。

そこには小さな池があちこちにあって、水鳥もてんでにカッカッ賑やかに気儘に泳いでるし、ボートに小さな男の子が乗って漕いでいました。幼い子どももお母さんに連れられて来ていて、あっちこち芝生でふらふら歩き回ってはしゃいでました。結構犬を連れた人たちの散歩姿も多く見かけます。歩いていると肌寒いのに、草の上に寝転がると日の光が暖かく、とっても晴れ晴れと気持ちがいいのでした。木々も整然と植えられていて、それぞれ何百年も経つほどの大きな樹木で、その伸び伸びとした枝ぶりが素晴らしいのです。草地にはあちこちにちっちゃな花々が咲いているのでした。それがちょっと感激なのですが、日本で見慣れていたキンポウゲやイヌフグリもあるのです。それに、この近辺の住宅街では家々の前庭にアジサイやシャクナゲなど日本で見られる花たちをよく見掛けますし。やはり同じ地球上の地続きなんだものになって、妙な感心をしたりしていたのです。

ところで先日、日本を出立する前に就職のことで連絡してあったセント・ジョージズ病院の児童精神科外来主任のドクター・ウォークという方に会って来ました。京都のプリテッシュ・カウンシルの紹介で知り合ったヤスダさんという女性が障害児教育の研修留学中に親しくなった病院のドクター・カーベルという女医さんからの情報で、そこにサイコセラピストの空席があるということで応募したらどうかと勧められていて、私はどんなものかと思案していたのですが。現実問題、あまりにも時期尚の感がして、当分英語力がなんとかましになる迄は職を持ってないからとこちらの事情をあちらにお伝えし、つまり現時点で

は応募を辞退する旨、わざわざお断りに出向いて行ったわけです。いずれ準備が整い次第、その節にまたお目にかかるということにしました。

ドクター・ウォークは実に紳士的に振舞われて、日本から来たばかりの小柄でシャイな私にごく丁寧に應對していただき、他の専門職の方たちにもご紹介くださったり、概して皆さん方、とても好意的でした。いつか又のご縁があるとは思えないなりに、そんな具合で一応ご挨拶はしてきました。しかしながら就職するということは、金を稼ぐという以外にあまり意味がないんじゃないかと、どうも今ひとつ気乗りしないのでした。まだまだ学ぶことがいっぱいあり、しかも自分が学ばねばならないものが皆目さっぱり見えてないという焦燥感が否応もなしにあるからなのです。

そこで、ドクター・ウォークに、一応私が研修コースとしてアンナ・フロイトのいる『ハムステッド・クリニック』はどうかと目下検討中なのだと打ち明けましたら、他にもトレーニングを受けられるところはあるとおっしゃって、トレーニング・センターの名前を3つ教えてくれました。『タビストック・クリニック』とか。どうもそれが彼のお薦めらしいのですが・・・。それこそ実に見たい情報で、収穫は大いにあったと云えましょう。まだどうするかは決められないでいますが、いずれ「案内書」を取り寄せてからと思っているところです。金と能力と興味をよく吟味しなければなりません。今、いろんなことを思案中で、なかなか考えが纏まりません。とにかく、まあまあ良い家庭に落ち着いているのが幸いです。

今回、ロンドンの南西部にあるセント・ジョージズ病院を訪れ、他にもロンドン中央にある警察署へ名前を登録しに行ったのですが、やっぱりロンドンは汚くてせわしなくて、とてもじゃないけどいけません。改めて今寄寓させてもらっ

てるロンドン郊外のミドルセックスのホストファミリーに感謝したくなりました。

こちらのご夫婦は時折口論するのですが、決まってお主人がシュンとして元気がなくなって、Mrs.J.夫人が宥めてキスしてやるのですから可笑しくなります。二人とも外国人だから生粋のとか典型的な英国人ってよく解らないけど、いろいろと日本と違うことが解って、実に興味深いのです。でもますます日本がよく思えるのはどうしょうもないです。AWLの Mrs.イダさんから電話があつて、私はラッキーだつて言うのですよ。ともかく頑張りますので！

では、さよなら 千鶴子より



1972年6月31日

お父さま&お母さまへ

月日の経つのは本当に速いですね。この2、3週間ばかりの間に、随分といろんなことがありました。全然これまで知らなかった人々に会い、ちょっと珍しい食べ物を食べたり、見慣れぬ植物やら風景を見たりで、言葉の方はそれほど上達したというわけではありませんが、大体日常語はしゃべれるようになりました。いろいろと不自由な思いをすることもあります、何ごとも勉強と思い、過ごしてきました。

今日は土曜日で、レベッカも Mrs.J.夫人も休みでした。すぐ近くの小学校で「お祭り」が開催されるとかで、レベッカのお伴をしました。散歩の折にいつか学校の内部を見たいって思ってたのが実現して嬉しかったです。大体イギリスの小学校は平屋建てで、すごく広い敷地に点々とそれぞれこじんまりと別棟の校舎が建っていて、グラウンドを幾つかに区切っているのです。

日本のようにせせこましさがなく、教室も、窓越しに覗いてみると、こじんまりと少人数教育のようでした。

ところでその「お祭り」というのが傑作で、フェート(fete)というんだけど、入り口で3ペンスの入場料を払って入ると、グラウンドいっぱい、いわゆる出店みたいなのが散らばっています。ちょっとした園遊会みたいなもの。PTAの役員とか先生方、それから高学年の子どもらが案内係になっていて万事取り仕切ってるわけ。すべて何をやるのにも2~3ペンス料金が掛かります。それら売り上げの収益は、おそらく学校の運営資金として寄付されるんでしょうけど。

いろんなゲームがありました。水の中にお金があって、もし落としたお金が重なったら、それが貰えるとか。数字が書いてある札が並んである盤にお金を転がして、止まったところの数字がお金より多かったら貰えるとか、どこでその車が停止するのかを当てるゲームとか、棒の上にあるものを遠くからボールを投げて落としたら貰えるとか。ごく単純なルールなの。昔から馴染んでいるらしい子どもじみた「たわいもない遊び」をわざわざ金を出してだけど大っぴらにやれるもんで、誰もが、大人すらも嬉々として大真面目な顔でゲームに挑戦していました。イギリス人のユーモア感覚・遊戯性には感服したのです。

それにちゃんと食べ物コーナーもあって、綿菓子や、アイスクリーム、ホットドッグが買えます。それに高学年の子どもらがチップスという(ジャガイモを薄切りにして油で揚げたの)を売って歩いているし…。食器類やら中古服が並べられたバザー・コーナーもあります。それから、ジャンピング・ボードやら、乗馬コーナー、それに高い所からロープ伝いで滑車にぶら下がり滑り降りてくるのやら、愉快的な蒸気機関車(ちっちゃいの!)コーナ

ーもあって、まるで遊技場みたいで、その大掛かりなものにはとっても感心しました。

殊に乗馬、蒸気機関車、それにロープ滑りは大盛況なのでした。レベッカは連れのお友だちは誰もいないのですが、一人でせっせと食べ物を求めたり、いろんな乗り物やゲームに出掛けたり随分と忙しかったです。きかんぼです。時折カンシャクを起こします。馬に乗るのに長い列があるのに無視してさっさと一番前に行って乗ろうとするので、いけないと横合いから私が止めるとひどい悪態を付きました。日々の暮らしでは(寄宿学校にいるお兄ちゃんはいるんだけど)、やはり一人っ子同然に多くの大人の中で甘やかされているので、ふと順番を忘れちゃったようなのです。そのうち帰るとか言って拗ねだして、放っておいたら、やっぱり気掛かりなのに戻ってきて、ちゃんと辛抱強く列に並び、自分の順番を待ちました。

Mrs.J.夫人は、すごく押しの強い人なので、子どもをダアーリン(可愛いひと)と呼んで、すごく可愛がるのに、ぐいぐいと有無を言わさず、押してゆくところがあるので、娘のレベッカも時にはカンシャクを起こしたくなるようです。人形にも、可愛いくせに、<おまえは悪いやつだ。言うことを聞かない…>なんてよく怒ってるのです。日頃溜まった鬱憤の八つ当たりというか、やっぱりねって感じで、私もつい彼女に同情してしまいます。

母親の気分の烈しいのは、いくら強い意志を育てるといっても、子どもにはあまり好ましくありません。Mrs.J.夫人は本当に断固としているので、私のように日本的なお手柔らかな扱いに慣れている者にはあんまりだから、つい堪忍袋の緒が切れそうに思うことがあります。ところが言い返そうとしても、私はやっぱり気が優しいので駄目だし、つい黙ります。可笑しなことに、

Dr.J.もそうなんです。よく長い長い討論(口喧嘩)をやった後は彼の方がシュンとしているんです。そう度々じゃないのですが・・。私の方が彼女のやり方に付いてゆかないとやはり駄目なようです。レベッカにも断固として激しく言い返してやるぐらいじゃないと駄目なのかと思っても、それがどうもイヤでなりません。かなり我がままなことは確かですが、空想力に溢れた、実に面白い子どもなのです。J.さんご夫婦お二人共、よく私を気遣って優しくしてくれるのですし、気が強いことや、押し付けがましいのはこちらの特徴だし、私も我慢して慣れてゆかねばと思うのです。ともかく面白い一日でした。 さようなら 千鶴子より



**1972年7月3日**

お父さま&お母さまへ

今日は日曜日でした。朝から曇り空で、まるで冬のような気候なのでした。先日から日曜日にはどこへ行くのか、友だちと美術館でも行ったらどうかと頻りに Mrs.J.夫人に言われてましたが、あまりの悪天候にどこへ行く気持も失せていたのに、せつかくの休みなのだからと彼女に頻りに言われるので出掛けたというわけなのでした。どこという当てもないので、一緒に来たオペア仲間のサヨコさんのお宅をお訪ねしたのです。偶然チカコさんという、もう一人の友だちも来ていたもので、3人集っての大討論会をしました。

日頃は簡単な英語の受け答えしかしてない鬱憤も手伝ってか、この日は3人とも大ハッスルで、日本語でえらく高尚で難しい「文化の差異」がどうやらとか「母親のあり方」とはどうやらとか、その他諸々しゃべりにしゃべったのでした。そして結局は、日本がいいということに落ち着くのでした。《日本の良さ》を知るためにわざわざ

ざ外国に行くこともないだろうと言われそうだけど、なかなか実際には解らないものです。自分の中に咲いた美しいものへの目覚め、‘日本の美’と云ってよいようなものを改めて発見できたということは紛れもなく一つの大きな収穫じゃないかしらとも思うのです。

それから、それぞれがホストファミリーと暮らしていて、日頃腹立たしく思っていることや、どうしても不可解だということを互いにぶちまけると、それが必ず誰しもが共通して思っていることなのでした。

まず第1に、母親がひどく怒鳴るということ。絶大なる権力を家庭内で持っていること、日本的な柔らかに包みこむ母親のイメージよりも、有無を言わず縛りあげる恐ろしい母親のイメージが強いこと。そんなのが私たちには我慢できないのです。今日でも、地下鉄に乗って、乳母車に乗った子どもが悲鳴に似た叫びをあげてるのに親たちはまったく知らん顔してチラッと見ないのを見掛けました。子どもを犬や荷物と同じふうに思っているのかしら。私たち3人の日本の女の子は、その幼児がゴオーツという音やら暗いということに怯えていて可哀想だと感じられるのに、彼ら親たちのなんと鈍感さというか無神経さというか、呆れるのでした。そんなのが日頃は「ダーリン(可愛いひと)」とか言って、子どもにキスを求めるのです。3人で大笑いしちゃったのですが、例えば就寝前に子どもが親にお休みのキスを忘れてたりすると、烈しく怒鳴りつけてくキスしなさい！ >って怒るんですって。あまりにも愛情表現が安っぽいじゃないですか！

第2に、食べることをあまりにもいい加減に雑に考えているってことが我慢できないのです。私の家庭では、時には手の込んだイタリア料理とかいろいろあるので不満はありませんが、大概の英国の家庭では、普通ステーキにポテト

を付けたら最大のご馳走で感覚なので、もう呆れてしまう。それだって滅多には出なくて、殆どは彼らの大好きなワンパターンの食事、ソーセージとか缶詰のベーコン・ビーンズ(大豆をトマトソースで煮込んだの)の付合わせ程度でもう彼らは大満足なんだもの。つい私たち日本人の感覚では、それって‘豚の餌’みたいじゃないのって思ってしまうもので、もう我慢の限界なのです。

それから概してしつこいということ。必ず言葉に表現して褒めたり満足だと言ったりしないと承知しないということがウンザリすることなのです。もうたくさんって感じなの。それから全体に我が強いということ。自分のことは飽くまでも正しいと通すその執拗さ・頑強さには参ってしまいます。日本的に<そうね、あなたの言うことも一理ある・・>とか、そんな暢気なもんじゃないのです。徹底的に自分を主張します。そのしつこさ、アクの強さはもうウンザリするのです。でも語学学校で会ったミセス・ヘズルデンのように美しい女性もいるのですから、英国人すべてを毛嫌いすることはありません。でも本当に私は悩み考えさせられます。人間の生き方・女の生き方・子どもの育て方、何が幸福かってことですが・・。

外出すると確かにお金はかかりますが、やはり日頃ホストファミリーに気を遣っている緊張感がしばし解けるようです。オペア仲間と日本語で自由に語らうことは、お互いの経験を突き合わせ、ああでもないこうでもないと喋りながらも心が整理されるのか、大いに慰めを得ていると思われま。帰途、電車を待っている間、スウェーデンから来た紳士とちょっと会話をしたり・・。気分転換も出来て、こころでどうにかやっとな勉強できるような、調子が出てきたかなと思ってます。いずれ又。 さよなら 千鶴子より  
.....



1972年7月7日

お父さま&お母さまへ

お手紙は続々と無事にこちらに届いておりますので、どうぞ安心して下さい。

さて、もう早、7月を迎えております。グングンと月日が経ってゆくのに、この3週間余のことを考えると、あつけなくもあり、又あまりにたくさんで喉にも通らないって感じだったり、まったく複雑な心境です。でも、少しずつここでの生活に慣れて、しゃべることや聞けることが出来るようになったように思えます。

もう一日も早く一人前に職業を持ちたいと思ったりするのです。先日お会いしたセント・ジョージズ病院の児童精神科医のドクター・ウォークから思いがけなくお手紙を頂戴したのです。ご親切にもいろいろと私の身を気遣ってくださり、アドバイスをしてくださったのです。さすがに懐が深いというのか、感心しました。彼がおっしゃるには、サイコセラピストとしての仕事をする前に、それよりちょっとやさしい、まあ実習みたいなことをやるのはどうかとご提案くださって、2つの病院をご紹介くださったのです。彼のご配慮はすぐ有り難いし、こんな自分でも一応専門職扱いされていることに、面映いという気分とともに、存外の励ましをいただいたようにも思われます。

ああ、けれどまだ何をするのも早いつて感じなのです。私は物事を甘く見ない性質だと思いますが、やはり現実には思ったとおりに厳しいのです。しかし、まあ、物事を甘くみないから、大概腹を立てたり、嫌な思いをしても、何とか克服します。オペア仲間の友だちが涙声で(日本に)帰りたいて訴えてきます。想像し難いでしょうが。私たちは概して‘しらけて’いるのです。

もういい加減にしろって感じのことが多すぎるわけです。どうしたって根が淡白でおとなしい我々には、すべてがあまりにも強すぎて、くど過ぎるのです。概してこちらの男性はひどく優しいです。ところが女性はというと、いわゆる愛嬌に乏しいです。同性同士だからなのか？でも口論するとご主人をシュンとさせる J.夫人もひどくご主人には気を遣って優しくします。いろいろと大変なのです。主婦として日々の遣り繰りをしながら、ご主人を大切に想う、そうした苦労はいつでも同じではありまじょうが。それでもひどく対等に口論しているのは見事というか、いかにもおっそろしいのです。食事も、ご主人と一緒にのときはすごくいいのですが、ご主人が不在な折りはもうどうでもいいって感じで、私をもほったらかしで、気のない感じなのです。いつでも同じなのですね。でもご主人と一緒にのときの夕食は素晴らしい腕を発揮します。私は彼女のやるのをじっと見ているのですが、スパイスやいろいろなものを次々と加えてゆくので、一体どういう味になるのやらと思うと、素晴らしいかたりするのです。それでご主人に、J.夫人は素晴らしい料理の才能があると言ったら、そう私が言ったと彼女に話して笑っていました。私はあまり誉めませんが、確かに彼女は尊敬できる面もあるのです。但し、朝2, 3回、夕方3, 4回はちょっとしたことでも注意されます。勝手が全然解らないのですから仕方ありません。優しく教えてくれるべきだと思うけど、彼女の性格だから、少々きついのも我慢しなくてはなりません。

オペア仲間の友だちがどんどんホストファミリーを変えていっています。そりゃあいろんなことがあるわけで。オペアを欲しがってる家なんて、すごくいっぱいあるの。エージェンシーもしかりなの。しかしながら、安手の家事労働力として期待されているのは明らかで、語学研修のためホーム

スティ先を求めていますといったこちら側の要望は二の次となりがちで、やはり今ひとつ決断が鈍ります。もう荷物まとめて出てゆきたいって、一日に何度か夢みるけど、Mrs.J.夫人の気分が和んでいるとき、ニコッと笑ってくれると、もうなんともなくなるのです。単純なんだけど。そんなものだよ。他人の家に寄寓してるって気疲れでないわけないわよね。とにかく私は今の自分のお部屋と、窓からの裏庭の風景が素敵で気に入ってるのだし、どこへ行っても始めの一ヶ月ぐらいは戸惑ってまごまごするんだし、このままやればそのうち Mrs.J.夫人からうるさく叱られることもなくなってゆくと思っ、何とか耐えているところです。

ところで、S子がおめでたですってね！お父さまとお母さまにとっては初孫誕生になりますね。おめでと！！すごく嬉しいし、けったいな感じですよ。

じゃあ又ね。さよなら 千鶴子より



1972年7月10日

お父さま&お母さまへ

今、語学学校の教室でこの手紙を書いています。今日から一ヶ月のサマースクールが始まり、集中講義が盛りだくさんにありますから生活に張りができて、私は嬉しいです。

昨日は日曜で、Dr.J.の運転でちょっと遠出でしたが、家族全員で郊外にピクニックに出掛けました。まずは J.家の一人息子のカールの寄宿学校を訪れました。イーストポーンといってイングランド南東部に位置する海沿いのリゾート地で、観光客の姿もチラホラ居たりで結構賑わってました。その日はあまり晴れていなかったのでも海もポヤーツと靄がかっていましたが軍艦

が一隻浮かんでいて、舞鶴港の風景を思い出しました。それから、丘へ皆で駆け上りました。小高い緑の芝生の丘がくねくねと果てしなく続いていて、下を見下ろすと海が広々と横たわり、レンガ色の屋根瓦の家々が緑に包まれてヒョコヒョコと建ち並んでいっぱいあるのです。カールの連れの友だちが2人一緒でしたが、彼らはいかにも元気な男の子らしく、まるで犬ころみみたいに互いにじゃれ合って、草の実を飛ばし合ったり、もう大騒ぎでした。

年老いた夫婦も若いカップルも、トレパンとセーターの軽装で、晴れ晴れとした顔で、露で濡れていた草原の散歩を楽しんでいました。Jさん夫婦も肩を組んで、嬉しげに子どもたちに囲まれているのでした。

それから丘を下り、しばらくドライブして、小高い丘の上にある一軒の瀟洒な家へと辿り着きました。それはカールの連れの男の子の家の別荘のようなのですが、ご両親は逗留中ではないらしく、人気のないガランドウの家でした。水道も出ません。けれど、居間の床に用意してきたものを拵げて、それぞれお皿にフライド・チキンとトマトとサラミとラッキョみみたいなのを分けてもらって、それに魔法瓶のお茶をもいただいて、皆で楽しいピクニック・ランチをいただきました。「ケンタッキー・フライド・チキン」を食べた最初の日ということになりますが、なんだかすっごく嬉しいものを食べたという昂揚感がありました。スパイスのせいか日本では味わえない味で美味しかったです。子どもたちは食べ終わると外へ出て、庭でテニスの真似事をしたり、ボールを投げ合ったり、キャキャと歓声をあげ、じゃれ合っているのです。J.夫妻は室内でのんびりと新聞を読んだり、昼寝したりくつろいでいました。私は、子どもたちを眺めたり、散歩したり、気持ちが晴れ晴れとなるの

でした。小鳥たちがピピピと鳴いていて、周辺の整然と並んでいる家の庭々には、綺麗にバラやその他たくさんの花々がこれまた整然と植えられていて、人影もなくひっそりとした閑静な別荘地なのでした。

ゆったりと昼食後のひと時を愉しんだあと、そこのお宅を去り、近くの広場へと移動しました。そこで、男の子らは Dr.J.をも交えて、イギリスの伝統的球技であるクリケットに大ハッスルするのです。レベッカは、犬をからかったり、高い滑り台を駆け上ったり降りたり、J.夫人と散歩したり、元気いっぱいでした。そこはなだらかな丘が幾つも果てしなく続き、羊やら馬が放し飼いになっている牧草地なのです。羊たちはただ黙々と草を食べているので、遠くから見ると緑地に動かない羊が黒く点々と見えるだけなのです。たくさんの親たちが子ども連れでドライブに来ていました。子どもたちはブランコや砂場で遊び、それぞれ親たちはのんびりと芝生に腰掛けて、子どもらの姿を眺めていました。私は砂場で遊んでいた子どもらに近寄り親しくなって、一緒に砂のお城と庭づくりをしました。とても感じのいい双子の女の子たちでした。10歳ぐらいですので、ちゃんと話も出来ましたし。

その折にちょっとハプニングがあったの。砂場に座りこんでいた赤ん坊の男の子が手に掴んだ砂を口いっぱいにはおぼったもんで、私は一瞬ギョツとして気が動転したわけ。ところが傍らにいた母親はまるで動じることなく泰然として「おバカな子ね」って軽くたしなめ、腕に抱き取ってやったのよ！いろいろと躰け方があるもんだと、これも英国人らしいと感心しました。そうかと云えば、ああだこうだと口喧しく叱責する親もいたり、いろいろと参考になるのでした。

女の子たちに戯れに花を摘んでやっていたときなんて、これってほんと私？って感じで、なにか夢のような、まるで絵の中にでも居るようだなんて一瞬妙な錯覚を抱いたりしたのです。あまりにも自分がすんなりイギリスに打ち解けて馴染んでいるみたいでしょ？でも確かに想像以上に此の国は緑に溢れてて、特に郊外の広々として整然とした牧草地は壮観なの。それでごく自然に気持ちも穏やかに落ち着いてきて、何やらハッピーな感覚に浸り、やはりここに居るってことが嬉しいって感じられたひとときなのです。

カールの寄宿学校の連れの男の子らは皆子どもらしく、いいご家庭の子どもさんなのでしょうが結構ワンパクで、でもその快活さが嬉しく、ご一緒して私も愉しかったです。カールは写真どおりでしたが、<レベッカと違って、紳士だ・・>なんて、Dr.J.は言ってたけど。やはりレベッカに似て、想像性が豊かなハッスル・ボーイなのでした。レベッカはカールと別れる時ワァーワァー泣いたけど、いずれ夏休みになり彼が帰宅すれば二人で楽しく遊ぶでしょう。子どもたちは、美味しいご馳走をいただき、おっきな飴棒を買ってもらって、ピクニックを終わりにしたのです。

ちょっと疲れたけど、いい一日でした。夕暮れ前自宅に着いて車から降りるとき、J.夫人が私に、長旅のドライブの労をねぎらって D.J. に有難うを言うように促したのだけど。彼女、夫の Dr.J.には結構配慮がこまやかでしょ？私は素直に従いました。確かにお蔭でちょっとした旅行気分でした。楽しかったですね。

では又。さよなら

千鶴子より



1972年7月12日

お父さま&お母さまへ

ようやく1ヶ月が過ぎました。ここでの生活に慣れるのに1ヶ月掛かったのです。今ではやっと峠を越えた感じで一段落しています。語学学校へ通っていることは大きな慰めです。家事も殆どあれこれもはや小言を言われることありませんし。大概一日のうちでなくてはならないことが呑み込めて万事きちんと出ています。レベッカのことでは頭が痛かったほど気難しい子どもだったのですが、なんとか今日この頃では関係性が築けたようです。昨日は一緒にお店やさんごっこをしました。それから人形とダンスをするのですが、彼女が人形の名前を日本語で付けるというので、サッチャンで意味は‘幸せ’だよって教えたら、そのような歌を自分で勝手に作って、踊ったり歌ったり、大芝居なのでした。実際お相手はしんどいと思うこともあるけど、確かにいろいろとお喋りの訓練には充分になっているのです。

今日、語学学校で出会った日本の女性は35歳ぐらいで、ご主人が東大の経済学教授、サバティカル(研究休暇)で家族ぐるみでこちらにお越しですって。お子さんが6歳と7歳の2人いらして、彼女頑張っています。いろいろと子どもの躰け方が違うことなどを休憩時間にお喋りしてちょっとした気分転換でした。他にもう一人、日本人で若い女の子がいるのです。こんど話そうと思います。私の英語クラスは外国人のためなので、それはもういろんな国から来てます。ドイツ、ポーランド、スイスとか、さまざまです。学習の内容は全然難しくないのですが、でもやっぱりいろいろと為になり、日本の英語教育もこんなふうだといいのにと思ったりするのです。

ところで、J.ご夫婦は1週のうち3回ほど夕方パーティとか友人宅でディナーにご招待されて出掛けます。まったくエネルギッシュなものには呆れます。次の朝はちゃんと7時過ぎには目を覚ましてレベッカとしゃべっていますし。疲れないのかしらと感心してしまいます。そうした社交で日常生活に変化をもたせて愉しんでいるのですけど。日本人の感覚にはあまりにも忙しすぎてしんどく思えるのです。でもご夫婦揃ってきちんとドレス・アップして出掛けるのもなかなかいいものです。レベッカは、私に慣れるにしたがって、両親の外出時ごねないようになりましたし。私は十分に J.家ではかなり調法がられる存在になってきてます。今日は Dr.J.が用事があってなのか、それとも遊びなのか、ともかく私が学校までレベッカの出迎えを頼まれました。午後の3:30です。まあいろいろと役に立っていると思ってもらえるならいいでしょうと、それも経験ですし、私も喜んでやろうと思うのです。

でも、そろそろ仕事を持つことを思案しています。焦りませんけれど。いろんな方法があるのですから、賢く選ばねばなりません。Miss.ヤスダさんからご紹介いただいた、かつて彼女が研修留学していた病院の同僚で Dr.カーベルとおっしゃる麻酔医の女医さんに近々お会いすることになっています。いろいろとアドバイスをいただけたかと思うのです。これまでの1ヶ月の経験は大変なものだったけど、無駄とは思いません。少しずつここでの生活に慣れて、身の処し方に自信が出てき始めたように思えます。

S.子も、他の皆も相変わらず元気であることと思います。そのうち皆を英国に呼べるようにと思って頑張っています。そうなるといいわね！いずれ又ね。 さよなら 千鶴子より

.....



1972年7月14日

お父さま&お母さまへ

J.さんご夫婦はよく外出するということが書きましたが、又自宅によく来客があるのです。夕食に招くこともあったり、遅く9時過ぎにぶらっと来て、お酒を少し飲んでしゃべって帰る人や、様々です。つい先日は最も懇意にしているご夫妻がお見えで、中国風の装飾してあるダイニングルームで晚餐をいただきました。メニューはまず初めにスープ、それから肉、豆、野菜サラダ、それからデザートは苺とアイスクリーム。とっておきの上等のお酒とオードブルが出ました。私はウイスキーや強いブドウ酒は全然駄目なのでいただくが、残念でしたが大層いいもののようなものでした。

それから、今日の夕餉のパーティでは、庭にテーブルと椅子を持ち出して、それにバーベキューをするとき使うような鉄炉に薪と炭を燃やしファイアーを炊きました。少し寒いぐらいなので、焚き火でからだを暖めるのです。食事は肉とサラダとジャガイモと豆ですが、それぞれにいろいろと味付けが変わっていて、美味しいのです。お客さま方の顔触れは、いつも親しくしているマーガレットという女の子、次は中国人の奥さんとイタリア人のカップル、それからまた背のものすごく高い英国風のカップル、それに J.ご夫妻と私ですから、家の中はまことに混雑を極めておりました。イタリア人、インド人、中国人、日本人、英国人、それにアイルランド人が居たりですから、もうさまざまで、それが皆でんでにペチャペチャとそれぞれの英語をしゃべるわけなのです。Dr.J.はご機嫌がよく、盛んに冗談を言って愉しんでいます。それぞれお互いに初めて会った者同士ですが、皆パーティ慣れしているのか、リラックスして楽しげにしています。私はもうあまり皆が早口で、

それもそれぞれひどく訛りのあるしゃべり方をするので、聴きながら正直なところ苦痛でならないのですが、極めてにこやかに愛想よく、なんとか場を取り繕っているといった感じでした。

お互い同士自宅に招き合うのもうまく世渡りしてゆくコツなのかも知れないけど、社交生活もこう毎日毎日では神経が休まらないのじゃないかと思うのです。傍目にも大変だなあって感じなのです。いろんなカップルが次から次に訪れるけど、自分としてはなんだか億劫で、どなたに対してもつい遠慮がちになります。慎み深く己の分をわきまえてということではそれでいいと思うのですが。どうにも気持ちが些かしらけているのは、やはり言葉のせいもあってでしょうが、ちよっぴりこれって疎外感なのかと思われまます。

いつか舞鶴で家族皆が揃って、それにお隣の南のおじさんやおばさんとも一緒に賑やかにパーティしたのが想い出されます。あの頃は良かったなって、懐かしむばかりなのです。私が大威張りで私でいられたという意味で・・・オペアなんてひどく曖昧な立場だし、‘仮住まいの仮の私’というか、どこか半人前の自分が自分にしてみてもどうもしっくりこないせいか、ホストファミリーと親しい人だからといっても見知らぬ他人にどういう顔してどう振舞えばいいのか解んないのです。自分のあるべきところに一日も早く戻りたいとの焦燥感が募り、つい思案に沈みがちです。日々やっていることといえば、まったく瑣末な家事・雑務なのですから、呆れるのも無理はありません。でもそれも一応把握するのに一ヶ月も掛かったのですから、バカにも出来ませんけど・・・。

自分がひどく面倒なことをしようとしているということは出発前から解っていたけど、やっ

ぱりなかなかくたびれます。でも気長にとは思っているのですし、着々と打つ手は打ってありますから。どうなろうとも、私の判断に任せて信頼してください。折々にポーとしらけたふうになりながらもいろいろと熟慮しているので、結構頭の中は忙しい限りで、まったくのところほんとにくたびれる話なのです。でもこちらの気候は涼しいので、それだけは助かります。

日本は暑いのでしょうか。お父さまもお母さまもからだには十分に気を付けてください。S子の方も順調でお腹の子も健やかにどんどん着実に大きく育ってるとか、本当に結構です。

では、さよなら 千鶴子より



1972年7月18日

お父さま&お母さまへ

昨日の日曜日は清々しいよく晴れた一日でした。私は朝10時頃に家を出て、ここからすぐ近くの公園に出掛けたのです。以前にもお話ししたことのある蕨の野のブッシー公園です。今ではすっかり私のお気に入りのくつろぎの場所なのです。小さな湖の畔の大きな樹の下で英語の勉強を3時間ぐらいやって、お腹がやや空いたので、ぶらぶらと歩き出しました。

公園の道路隔てたさらにその向こうには、また別の広大な公園があって、そこは原っぱみみたいなブッシー公園とは違って、整然と薔薇の花が植えられた庭園があったり、レストランやらみやげ物屋さんもあって、あちこち観光客の人だかりがしていました。そこには宮城があるのです。『ハンプトンコート・パレス』といって、昔々その王様のヘンリー八世が6人の妃をもっていたんだそうで、次々に新しく変える度に古いお妃の首を切ったんだとさ！あまり趣味がよろしくないと思

うし、入場料も取られるので、その城には入るのを止めて行き過ぎ、ブラブラと歩くとすぐにテムズ河に差し掛かりました。

橋付近から遊覧船が出ていて、またすごい人だからなのでした。それらに混じって、なんとも面容の凄まじい老婆と男の子がちっちゃな花束(野の花)を人々に差し出しているのです。ジブシーなんですって。それで<ジブシーの子どもたちにお恵みを>って言っているの。汚い服装で、彼らの顔つきが本当に魔法使いの意地悪なババアと悪魔っ子という感じなのです。私はどうしようと思ったけど、ジブシーってどう考えたらいいのか解んないし、言葉が判らないふりして逃げただけ。ちょっと初めての経験でしょ、ジブシーって。流浪の民で、日本じゃわりとロマンチックに考えられているけど、いわば無宿者でならず者なんでしょう。こんなにも英国には外国から流浪してきている人々でワンサと溢れているけど、それでも一番毛嫌いされて人間扱いされないのがジブシーのようです。

黒人は鉄道で下働きするとか、やはり労働者階級に多いけど、パキスタン系・インド系の人よりも真面目な印象を持つのは何故なんだろうかと思えます。一応彼らはイギリス社会に同化してるように見受けられます。インド・パキスタン系移民に対する偏見がすごく根強いって噂です。一方で黄色人種って、ほんとうに少ないです。都中心のロンドンとか、よほど繁華街などに行けばちらほらと見掛けますが。。

人種的偏見なんてくだらないとは云え、意外と難しいものなのです。傍目から見ても、この国の移民政策って危ういような懸念を覚えます。政治亡命者に対する寛容さは誉められるとしても。。支配統治する側に見れば、

社会の底辺を支える下層階級(つまり低賃金の労働者)は確保しておきたいわけでしょうし。でも、誰もいつしか己の人権に目覚めてゆくわけで。。此の国の教育・医療財政がいずれ破綻しなければいいのですが。。

英国人は概して殻が固いと言われますけど、これほど雑多な人種が集まるなかで、自分こそが真のイギリス人なんだって主張しようとしたら、あまりそうそう外国人にニコニコ愛嬌を振りまく気にはなれないでしょう。階級差別は当然のこととして傲然と構えていなくちゃね。まだまだ自分たちの既得権は侵されていないとの余裕を持たせておきたいのは解ります。今のところはまだ‘棲み分け’は辛うじて維持されているみたいですし。でもそうした地域格差バリアーも崩れてゆくのは時間の問題のようです。冷徹に無関心を装っていても、内心は悪くすると自分の国をいつかしたら移民難民に乗っ取られるのではとの不安がありはしないかと勘ぐってしまう。それほどインド・パキスタン系の移民がぞろぞろ巷に溢れているわけ。一見して彼らは決してイギリス社会に同化しようとしていない。服装・言語すべて自分たちの流儀に固執し、我が物顔で闊歩するもの。さすがお巡りさんとかの公的な地位は、パッチリ白人系の生粋の英国人やアイルランド系で占められていますけど。。

この頃国家というものを頻りに考えます。やはりピカデリー・サーカスやらロンドン都心では『ソニー』など日本製の電化製品が眼の玉の飛び出るような価格でピカピカ華々しく売り出されていて、そのショーウィンドウの前に人々が足を止めては唯うつり呆然と見惚れている姿を眼にすれば、私もなにやら悪い気はしない。つまりはそれが、日本の国力高揚やら国家の威信を象徴してるわけだから。。

しかしながらその一方で、これ程あちこち広々とした緑地があって、家族揃って日光浴をしたりボール蹴りしてるのを眺めていると、あまり気取らないけど、つまり対外的にはいくらか斜陽化しているとは云え、英国はがっちりと守られている。さすがだと思うのです。国民の憩いというもの、やすらぎというものを大事にしているのは国民一人ひとりが自分の幸せを主張できているからでしょう。国家も大変なんだろうと思います。食料品の99%ぐらい輸入品に頼っていることはスーパーマーケットで一目瞭然だし、でも人々は全然そんなことに案ずる様子もなく、ほんとによく食べます。

ところで、ここテムズ河沿いにはサンドウィッチとかアイスクリーム、それに焼いた貝を食べさせる店やなどがあちこちにあり、観光客気分できつろげる、華やいだ場所なのです。男の子たちは海水パンツで水辺に入って、バシャバシャ魚を追いかけています。獲れたのをみたら、どうもメダカなのです。男の子がくぼく、すごい大きいの獲ったよ！>って威張るのですが、可笑しいですね。それから、河向こうの木陰のあるハンプトン・ヒルという公園で昼寝をしました。陽の光がとても気持ちがいいのです。あっちこっちで子どもたちが裸んぼで、はしゃいでキャキャやっていたり、大人たちはごろごろ芝生で寝転んでたり、河にはひっきりなしにボートやモーターボート、それにヨットも往来していました。私もホットドッグを齧ったり、とても気楽な一日でした。

一番印象的なのは、お年寄りのご夫婦が連れ立って散歩している風景です。よくまあ、これまで一緒だったなって、他人ごとながら、微笑ましく思ったり・・・。なかなかいいものです。では又。さよなら

千鶴子より



1972年7月22日

お父さま&お母さまへ

私の方は取り敢えず平穩にといいますか、毎日まあまあ過ぎてゆきます。Jさんの息子さんのカールが寄宿学校から戻ってきているのです。活発な10歳の男の子で、家の中ではレベッカが相手だといひ彼女を泣かしてしまします。レベッカはすぐにぐずったりで、泣きべそなのです。それで Mrs.J.夫人がつい怒って、まあガミガミと小言を並べたりでうるさいこと限りなしです。

カールは私と卓球をしたがって大変なのです。エネルギーが有り余ってるみたいで一日中でもやりたそうで、お相手する私の方がへたばります。彼の挑戦を受けて奮闘しているうちに、ごく自然に腕前も上がり、お蔭で私も彼もだれど格段に上達したと思います。2人はいいコンビであるようです。妹のレベッカのように J.夫人の悪影響を直接受けていないので、私としては扱いやすいです。でも、すごく紳士のような顔をする時とメチャクチャ男の子に変貌する時があるので油断は出来ません。実に面白いです。J.夫人は口喧しいので、カールは閉口しています。頻りに逃げ惑ってます。あの口喧しくて押し付けがましいのはどうしたって直りそうにありません。AWLのイイダさんが、イタリア人は‘舞台俳優’だって教えてくれました。気分がころころと変わるので、いい時はすごくいいのですが、悪いとほんとうに物凄いです。そう思うと、あっさりと落ち着いて彼女を見物できるわけなのですが、こんなに喧しい家にはもはや居たくありません。

それに来客があつたりで、なんだかんだといひ台所で私も手伝っていると、每晚10時頃にしかからだは空きません。勉強にもっと打ち込める時間的余裕を確保することが急務です。

これじゃダメだという焦りが募ってきて、それでオペア仲間の友だちに励まされて、俄然ここでホストファミリーを変えることに決めたのです。初めのうちは今の状態で我慢したものかどうやろかと随分考えたのですが、どうやら潮時らしいです。

ここ最近ではオペア仲間たちがてんで自由にホームステイ先を変わってるとの情報を耳にします。自分で面接して選ぶのですから、まあまあ満足できる結果になるのではないかと私も思い始めてます。どこかいいホストファミリーを、AWLではない、別のエージェンシー（斡旋業者）で紹介してもらって、自分で選択して、いずれ落ち着くことでしょう。この頃ちょっと動いてみてもいいかなって自信が出てきました。近頃では私も目が肥えてきたというか、イギリスのご婦人のいい資質ってすごく分るようになりました。語学学校の講師の先生とか秘書さんはやはり素敵なのです。英国へ来てイタリア婦人に悩まされることもないわねって感じで、語学習得という意味でも非効率的に思えますし、万事よろしくない判断したのです。

実は、いつぞやセント・ジョージズ病院のドクター・ウォークに教えられた専門職のトレーニング機関の件ですが、2つほど‘案内書’を取り寄せ、その概要を調べました。チャイルド・サイコセラピイのコースなんだけど、その2つともそれぞれ特徴があり興味深いものでした。どちらにするかは目下検討中ですが、いずれも新学期は来年の秋からのスタートなのです。それまで充分に英気を養い、此の地にしっかりと根付いて万全の態勢でトレーニングに臨みたいものです。そろそろ応募の手続きをしなくてははいけません、おそらく選考には結構手間取ることが予想されます。じっくりと長期戦の構えでゆかねばなりませんでしょう。

それから、『日本大使館』主催の日英親睦サークル「若竹会」というのがあるらしいの。かなり規模が大きく、折々の企画も充実していて興味を引かれました。此のイギリスという異国の地に今後私が根付いてゆくためにも、日本人同胞との絆が必須に思われます。入会して交遊を愉しむのもこれからいいかしらって思ったりしています。

ホストファミリーを変わると決めた途端気分がスキッとしました。新しいところから連絡する迄、今後そちらからの便りをしばらく控えてください。オペアの仲間がいろいろと力になってくれて有り難いです。それもお互いさまだけど。慎重な私がまあようやく戦闘開始といったところかな！改めて本来の渡英の目的に向け、態勢の立て直しです。俄然力が湧いてきました。

では、さようなら 千鶴子より



1972年7月26日

お父さま&お母さまへ

今日は7月26日（木曜）で、このレターを語学学校で書いています。私がホストファミリーを変わるというので、おそらくそちらでは心配して気を揉んでくれているだろうと思い、取り急ぎ近況をお知らせします。

実は月曜～水曜の3日間に、語学学校の午前中の授業を欠席し、ロンドン中央のエージェンシー（斡旋所）を2ヶ所ほど訪ね、‘オペア募集’の下見検分に専念したというわけなのです。私の方、なにかと時間のやり繰りに余裕がないため、クミコさんという長崎出身の女性があれこれ予めお膳立てをしてくださったり随分とお世話になり、大変有難かったのです。

一つめは、殆どすべてが9月以降の求人ばかりなの。7月 & 8月ってイギリス国中の誰もが休暇で海外へ出掛けたりするわけなもので、めぼしいのがなくて、もう一つめは、私が今の語学学校に継続して通えるようにこの近辺でという条件を出したのでそれに該当する求人は少なく、いいなという感触でいざ電話してみると、もう他の人と契約済みであったりとか、あとは奥さんが手に麻痺があるとかで、あちらの事情が現在の私には対応は無理としか思えないため断ったり、まあ実に様々だったのです。

そんなこんなになっているうちに気分的にも消耗してきて、次第にオペアという‘職種’が色褪せたものに見え始めたのです。語学研修のためのホームステイといった‘建て前’がガラガラ崩れるようで、その実態は、雇う側にしてみれば、安上がりな家事労働力でしかないのだということに悟らざるを得ない。幾ら強気を装っても、やはりこの現実には辛いものがありました。幾らかでもまだファミリーの一員と遇されて、半分お客さま気分であられた J.家のこれ迄がまだまじったとも、実は至極ラッキーだったのかも知れないやらと今にして否応もなく自分の甘さ加減が思い知らされ、やはり異国暮らしというのは怖いものだとどうにも背筋のヒヤッとする思いがしたのです。

エージェンシーで斡旋する職種というのにはいろいろあって、デイリー・ヘルプ(通いの家政婦)やらベビー・シッター(子守り)やらと家事全般に亘っての労働力なわけですが。クミコさんとも話してただけど、こちらの人たちは実に人使いが巧妙というか得手なのです。ああしてこうしてと指図するのは得意ですが、勿論のこと、相手にいかなる感情をも抱くことはありません。感謝の心すらもない。その感受性の無さを云々

する以前に、人間同士としての関係性が遮断されているのですから道理です。エージェンシーを回っているような家庭があることを知りましたし、実際に何軒か尋ねてみて解かったことは、あちらが私という人間を知ろうとすることは皆無であり、私の個人的事情など、意図やら希望すらもまったく彼らの関心外だということ。事実、こっちはあちらの知ったことじゃないといった具合で、彼らイギリス女性たちの無関心・冷徹さは、J.夫人の日頃のイタリア人風の自分の感情に素直でその振る舞いの賑々しいのがむしろ可愛らしく思えたほどです。

例えば或る家庭を尋ねたら、謹厳実直そうな中流家庭のイギリス白人女性でしたけど、わざわざお茶のおもてなしまでも期待はしてないとしても、いかにも事務的に台所で突っ立ったまま、柱に貼ってあった週ごとの家事労働のスケジュール表を、それもナイフの切っ先でいちいち指し示しながら、こと細かに説明し始めたわけ。その聡明そうな顔だちに似合わない神経の粗さには恐れおののいた。彼女の英語はまずまずご立派でしたけれども。家事労働力としてこき使うだけ、ファミリーの一員としてなんてとんでもないといった印象で、もう丁重にご辞退したのです。

そんなあれこれがあって事態を冷静に総括してみても、やはり今のホストファミリーが私の語学習得にとって決していい環境じゃないことは十分に解りましたし。とにかくこれまで躊躇するばかりでしたが、こころで本格的な就職先を探してみることにしました。J.さん一家が8月17日から西インド諸島へ2週間ほどの休暇旅行を予定しています。その間に身辺を片付けて次へ移りたいと考えてます。それでヤスダさんが元居た病院とか、他にも出来るだけいろんな人に

会って情報を得るつもりです。今私がやれると云えば、どうも精薄児のセラパイがいいんじゃないかと、それなら日本で経験もあり、やれるって思えるので、その線で当たってみるのもいいかも知れません。

いろいろとご心配お掛けして申し訳ありません。親にしてみれば、私のこちらでの落ち着かない様子のあれこれを手紙で知らされても、どうにも唯々心配でしょうが。私としてはあれやこれやと動いているうちに次第に力が湧いてくるのが感じられ、むしろ嬉しいのです。誰に対しても恨みやら敵愾心とかは全然ありません。まったく冷静に、なんでも勉強だと思って観察しています。うわべだけでは決して窺い知れないイギリス社会の‘楽屋裏’をまさに覗かせてもらっているわけですね。でもまずは自分を守ることを強心に銘記する必要があります。ずる賢いほどに要領よく立ち回る必要を感じます。傷つけられることを怖れずに、また場合によっては傷つけることすら厭わずに…。でもオペア仲間と語らう折には、日本人女性の美德を失くしたくないわねとやら言ったりするわけで…。慎ましく控え目だったり、まあそんなことだけど。ほんとに変わるべきなのか、変わるべきではないのか、煩悶を重ねています。願わくば自分のこれまでの良さは良さとしてそのままに、かつ自分に欠落していたものは新たに己自身のものにし、品位のある優れた女性になりたいと願っています。

どうぞ何ごともうまくゆくように祈っていただきます。おそらくこのまま8月中は J.さん宅に居ますので。いずれ又近々便りします。英語、拍車を掛けて頑張っていますので。

では、さよなら 千鶴子より



1972年7月28日

お父さま&お母さまへ

昨夜から J.さん宅にフィリピンからお客さまがみえています。ミス・ゴンザレス、それにマリサというお嬢さんですが、2週間ほど逗留する予定なんですって。3階のゲストルームに寝泊りしています。フィリピン人って初めて見たわけだけど、いい家庭の人らしく、西洋風なセンスで、それにまことにおっとりとした感じの奥さま然とした人なのです。どうやら華僑の出自らしいのですが…。

私がここではオペアとして Mrs.J.夫人の家事を手助けしていると告げたら、ステキだ、ステキねって悦ぶの。おっそろしい状況だってこと、あんまりいい人だから解んないみたい。ちょっとおっかしいね。朝なんて、J.夫婦が出掛けてしまった後にのんびりキッチンに降りてきて朝食を召し上がるんだけど、まるで気楽にそこらにあるものを食べたり、あれないかしらとか私にご所望を述べるやら、全然遠慮しないわけなの。それに何でも必要なものがあつたら買ってくるからと言って、私の面倒にならないように一応気遣ってくださるし、とにかく気持ちのいい人たちのようにも窺われます。それに日本に2週間ほど滞在してたことがあるとかで、カタカナが書けるとやら、すき焼きが大好きだとやらいろいろ親しくお喋りをされて、戦時中日本の占領下にあった時代の話などもしてくださるの。英語をフィリピンでも公用語の一つとしてしゃべっているってことですが、全然流れがこちらと違うのです。調子が狂う感じですが、耳慣れるとそこそこ解らなくもない感じです。とにかくいい人たちなので、私もホッとしています。

ちょっとした予定外のハプニングで、まったくの赤の他人が同居することになり、それも

どうい経緯でこういことになったのか Mrs.J.夫人からまるで説明も一切ないのだけど。この調子だと私の家事は幾分増えるでしょうけれど、J.夫妻が、まあ体面上取り繕ってるからなのか、ご機嫌よく振り舞っているわけで、私もちょっと気が紛れるし、むしろこの時期これでもいいように思われます。私もこの頃は、以前のように J.夫人の気分に巻き込まれてクルクル舞いすることなく、笑って切り返せるようになりましたし。それだけこちらでのやり方が身に付いたとも言えましょう。

もしも可能ならば9月以降に就職する決心をしまして、まずはこんな状態でここにもうしばらく一ヶ月ほど滞在を延期することにしましたのです。

オペア仲間の友人から近況がいろいろ耳に入ってきます。それぞれ運・不運があったとしても、結局は自分次第だということなのだけど。動くときには動かなくてならないけど、動いてはならないときには動かないのが賢明なわけで・・・今のところそれぞれに踏ん張っておるようで、異国での暮らしに行き詰まってやむなく帰国ということにはまだ誰もなっちはいないみたいで、しぶとく次の展開に挑んでるのですから、なかなか日本の女の子たちの奮闘ぶりには感心してるのです。どうにでもなるものだと、なにかしらふてぶてしさみたいなものも芽生えて来たり・・・。

それから時折、近くの教会に立ち寄り一人お祈りしたり、いろいろと心を鎮めながら、自分の行く末を考えたりしているのです。なんと云っても両親が日本で祈ってくれてると思うことが心の支えであり慰めです。……

どうぞ心配なさらず、祈っててください。  
では、さよなら 千鶴子より  
.....



1972年8月2日

お父さま&お母さまへ

もう8月ですね。そちらは暑くて暑くてたまらない時期でしょう。こちらは雨がしとしと降ったり、まるで梅雨の加減で寒かったりなのです。半袖の夏服もほとんど着ることがありません。でも語学学校の先生方はいつも殆ど袖なしの服を着てますので、慣れたら寒くはないでしょう。

もう8月なのかと感無量です。今では私もどうかホームシックに打ち克ち、ここでの生活のリズムも出来て、からだをへとへとに消耗させることもなく、マイペースで頑張っています。やはり英語の方は日に日に流暢な喋りが身に付いてゆくように感じられます。英語力こそが私が何をするにしても根底に求められるものであり、またそれが目指すゴールでは勿論なく、飽くまでも専門性を見に付けるための道具に過ぎないということ。だから尚のこと真剣にならざるを得ません。

語学学校の私の英語クラスに他に日本人女性が2人いて、一人は東大の経済学教授の奥さん、もう一人は製鋼関係の日本企業の海外駐在員の奥さんで、2人とも優秀な方たちですが、およそ緊迫したのを見受けられないのが羨ましい限りともいえます。ここで生活費を稼ぎながらの、つまりはイギリス社会に経済的に依存するという暮らしはやはりどう考えても気楽ではありません。だんだん此の地に慣れるにつれて、かつての懐の深い英国はもはや金メッキが剥げかかっているような感じで、寛容さや鷹揚さを期待するのは無理に思われます。見栄っ張りなわりには、何かしら余裕がなくなってます。全体に仕事ぶりにしても怠け者が多いというか、例えば通りで道路工事をしている作業員が

3人いるとしたら、まずそのうち2人ほどはぼんやり為す術もない具合にブラブラと突っ立ってるわけ。労働意欲の低下は呆れるばかりなの。それでいて少しでも多く賃金を得ることに執し、簡単にストライクはするわけで。とにかく安楽に暮らせたならもうそれで良しといった生活スタイルが蔓延しているようです。日本人のように己の仕事に生き甲斐を求める心性とは根本的に違うようなのです。この国の人間はもはやがたが来てるといふか、夢見る未来がないといえぱいいのか、空恐ろしくすら覚えるのです。人心も荒廃してゆくようで、世智辛くなる一方ですから、とにかく自尊心の強いのは結構だけど、押しの一手で自分を主張したものが勝ちて感じて、常に支配・被支配のパワーバトルになってしまう。妙にぎすぎすと緊迫した雰囲気は漂っているのです。

ところで J.家に逗留中のフィリピンの奥さんだけど、最初の頃はおおらかで感じは悪くなかったのですが、驚くほど自分のことを自分でしない人です。他人の家に泊まっていたら、多少なり家事などに参加するとか気遣うでしょうに。自分に都合よくも、私という‘メイド’がいるからいいと勘違いしてるせいか、全然家事には手も出しません。それどころか、部屋を掃除機でやってくれとか、ゴミを捨てておいてくれとか、私に頼むのです。娘の方も同様だけど、何が食べたいとか、何をどうして欲しいとやら言うだけは言うけど、自分で食べるものをつくらうとは絶対しないし、後片付けも私に任せっきりです。家事労働なぞしたことがないのかしら。おそらく富裕層のいい家庭の人たちなんだろうと思うけど、ほんとに世話の焼ける人たちです。まるで怠け者でしかない、まったく人間として高級ではありません。J.夫人からなんら釈明もないから直接に文句も言えないけど、ホテルに住まう経済的な余裕が

ないわけもなかりうに、なんで J.家にホームステイなのかとどうにも頭をひねってしまう。どんどん化けの皮が剥がれて、その人間性の卑しさ・抜け目なさが鼻に付く。金持ちになるということは召使いに身の回りのことを任せ、自分の手は極力使わないで、ひたすら自分を甘やかし、享樂的に遊興三昧に明け暮れ、結局は食い散らかして終わりの人生なのかしら。これって一個人の問題を遥かに越えて、こうした人間を輩出しているフィリピンという国家体制が真底危ういといふか、実に由々しき事態にあるとも思えたのです。

パキスタン系でも英国知識階級の Dr.J.はまだましで、自分で自分の食器を片付けたり、私に後を任せてもいつもくありがとう！>を忘れません。彼の出自とか家族的背景はまるで知らないのですが、おそらく英国でそこそこ真つ当な教育を受けたに違いありません。寄宿学校に居る彼の息子のカールみたいに・・・やはり人々がその地でどのような人間として造られているかを知れば、そこに紛れもなく国の威信やら美德が表れます。やはりイギリスは侮れないと思ってしまうのです。彼は疲れていない時には私にいつも優しく気を遣ってくれます。それがイギリス紳士並みの儀礼だとしても私は慰められます。

でも時折 Dr.J.っておかしな人なの。いつぞや私の夕餉を作ってくれたんだけど(自分は出掛けるし、Mrs.J.夫人とレベッカは留守で)、私とその料理の作り方は解っているから大丈夫だって言うのに、<否、チズコは解らない、知らない>と妙に言い張って、たかがビーフ・ステーキなんだけど、料理してくれるわけ。それで私に食べる食べるって勧めてくどうだい、美味いだろう？！>と自慢するの。それもちよつとした気まぐれだけど。そんなふうに人に自分の出来ることを見せて威張るって何やら子どもじみてるけど、

得意がっているんだから可笑しいのです。でもまだ人間として可愛いげがあると云えましょう。

J.夫人の方は、イタリア人氣質ってよく知りませんが、すごい気分屋で、時に私にえらそうにして何かを注意して教えようとするときなぞまったく完璧に見事なお手本に示してくれますが、全体にいい加減で、下着をベッドルームにほったらかしたままでいるとか、トイレの紙を買うのをまるで忘れていたり、概して大雑把でデタラメなのです。彼女が教えてくれた為になる事は、私のプラスになるので覚えておくのがいいでしょうが、彼女の気分のムラは一切無視してます。云うなれば‘自分主義’でしかないとしても、生来的には憎めない人なのでしょうに、どうも私の方が今ひとつ彼女に打ち解ける術を心得ないのが問題かも知れません。それもおそらく大人の女としての苦勞を知らな過ぎる、つまりは私が子どもだということに尽きるようで、薄々そんなことも判ってきたことでもあります。だからといってヒステリーは厭ですし、厭なものは厭だといった、こちらの頑なさという子どもっぽい純粋さが厄介至極なわけなのです。

日本人のように、すべてのものに深い感謝を捧げるとか、人生に真・善・美・を常に求めるといった真摯な姿を此の地の人たちに果たして期待できるのかしらと思うと、すでに絶望視せざるを得ないような気分なのです。けれども、こうした悲観は勿論私の為になりません。いわゆる狭量な‘毛唐嫌い’にはなりたくないものです。外国人だろうと「いい人はいい」ということを決して忘れたくありません。異国で母国を背負って生きてゆく気概というのはちょっと滑稽にも聞えそうだけど、やはり一個人同士であっても、異国での誰彼との出逢いにも国家の品格が問われるということを肝に銘じたようなことでした。

Mrs.J.夫人の同僚のアイリンというイギリス女性はちょっと顔色がすぐれない人で、私は初め好感を持つということはなかったのですが、人間のよく出来た人です。いつぞや2人で一緒にこちらで留守居をした折もさっさと何でもしてくれだし、今でも私に話すときは気遣ってはつきりと丁寧に話してくれます。本当に一緒に暮らしても気持ちのいい人なのです。8月7日に J.さん一家が旅行に出掛けた後に彼女としばらく暮らすこととなります。それを私がここまでよく耐えた‘ご褒美’と思って楽しもうと思っています。

そして9月からは、ほんとうに頑張るつもりです。一度決心が付いたら、きっとやれるって覚悟が決まりました。改めてしっかりと将来を見極めながらも頑張ります。ようやく私は真っ直ぐに頭をあげて、前に進んでゆける自信がもてたような気がしているのです。ではいずれ又。

さよなら 千鶴子より



1972年8月9日

お父さま&お母さまへ

毎日曇ったり晴れたり天気ですが、全体に涼しく、気持ちのいい毎日です。そちらは暑くてたまらないだろうと思っています。

この時期って日本にいたら、毎日暑くてぐだぐだと寝て暮らしているだろうと思います。かつて京都市『若杉学園』の母子療育通園施設にいた頃、子どもたちとのプレイが終わった後などはもうたびれて、日陰を見つけては昼寝していたりして、申し訳ないぐらい暢気にさせてもらってたって懐かしく思い出します。何故かそんななんでもないあれやこれや日本でのことが日々頭をヒョイヒョイ過ぎり、頻りに懐かしく想われてなりません。

今自分が異国にいてることが嘘みたいですが。あの折の生活もこちら今の生活も現実の暮らしの重みには違いはなく、いずれも苦労は苦労なのです。無間やたらに異国に憧れるのは無意味というものです。ただやはり経費からして渡航は日本人にはまだまだ贅沢と考えられています。こちらの人たちにとって、イタリアとかフランスへの休暇旅行は年一度ぐらいは誰でも当たり前ぐらいになっています。日本もいずれそうなるのかしらね。今カール(J家の男の子)は単独でイタリアのおばあさんの所へ行っています。一週間ほど滞在するらしいです。幼少時から外国で見聞を広め、それでいつしか国境を越えて確かな自己の居場所を見いだせるとしたら、やはり羨ましいと云えましょう。よほど自分が試されるでしょうけど。いつぞや私に卓球で挑み、腕を上げたみたいに、彼ならいろんな出逢いの中でうまく折り合いを付けて生きられるでしょう。

例のフィリピン人のお客さんは、私が週末泊りがけで友だちの所へ行ってる間に姿を消しました。その件では J.夫人は全然一言も私には告げなかったのです。だから結局あの人は誰だったのかわからずじまいというわけ。もしかして会社絡みの接待でホームステイをさせてあげたということかも知れません。親しい縁故というわけでもなさそうですし・・・おそらく彼らにとっても‘招かれざる客’だったのかも知れない。というのは、ふと気付くと、その晩にご夫婦とも早くから寝巻きに着換えてベッドでくつろいでいたので、さぞかし気苦労だったろうと、まったく社交の付き合いも大変なんだなって、ちょっぴり同情をしてしまいました。でも社交は生活のカンフル剤というか、此の地の人々は何かで気分を引き立てておかないと無性につまらないらしいのです。で、今回のことで彼らが懲りたとも思えないわけです。

或る消息通に依ると、フィリピン人の富裕層はアメリカの上っ面だけを見て物質主義に染まってしまい、遊び好き・派手好きで怠け者なんですから。そんなふうに一生涯送れたら悪くないけど。やっぱりその蔭に虐げられている人間も当然いるはずだし、やっぱり自分のことを自分でしないような人間は最低なのです。私の経験をオペア仲間やら語学学校の友人らに話すと、<ひどい！>って呆れるけど、冷静に考えると、<あなたはいい経験をしてるのよ>ってことに落ち着きます。本当にそうなのかも知れません。

或るオペアの日本人の女の子のホストファミリーはひどくいい人ばかりで、よく優しく気を遣ってもらっているようなのね。そんなんだと、むしろ私は自分の引っ込み思案で物怖じする性格のままでいただろうし、こんな厄介至極なことが盛りだくさんの家庭に居ればこそ、いろいろと揉まれて成長もできたのだらうと思うのです。この社会では自信があることが重んじられ、自分を強く主張する人間が勝つのです。討論が出来ないということは下等なことを意味するのです。それだけ人間関係が殺伐としているとも云えませんが。でもそれすら呑み込めれば、案外と暮らしやすくなる社会でもありそうです。

或る日、語学学校でのこと。私が気弱になってつい愚痴めいた話をした折に、日本から来ている大学教授の奥さんと海外駐在の会社員の奥さんに励まされ<こちらが弱いとみたら、あちらは付け上がるから、絶対にガンとしたところを見せなさい・・・>と入れ知恵されたわけなの。でも、結局のところ、人が自分にああしたこうしたということじゃなくて、それを逆手にとって自分の都合の良いように事を処理できなかった私自身の未熟さを猛反省したのです。ここに至ってはもう遅くなる外はないというわけなの。

それで一度自信のある態度を取ると  
ひどく事はうまくゆきます。特にレベッカとの関係  
がひどくうまくゆきます。毎日纏わりつかれて、ひ  
どく疲れますが、想像力のある子なので付き合  
うのが結構面白いです。要は手綱さばきなわけ  
です。私が頑としてイニシアチブ(主導権)を握っ  
て離さない限り、‘じゃじゃ馬さん’の彼女も抑制  
が保たれ大丈夫なのです。日本の歌を歌ってや  
ると、悲しいって涙を出すのです。可愛く思ったり  
します。幼いながら母親似で大した舞台俳優の  
素質があり、お相手をする私も相当の演技力  
を要します。ものすごい喧嘩して泣かすこともあ  
るけど。後はケロッとして、仲良しになったり・・。  
とにかく退屈しない可笑しな子どもです。私も大  
した強い人間になったものだと言っています。私  
とレベッカとの仲がうまくいっていると、Mrs.J.夫人  
もレベッカに怒鳴ったりイライラする必要もないの  
でご機嫌なのです。やれやれと思います。まずは  
成功していると云えましょう。

ではさようなら 千鶴子より



1972年8月23日

お父さま&お母さまへ

ご無沙汰しましたが、元気です。お  
盆も過ぎ、そろそろ9月を迎えようとしています。  
今頃そちらの暑さは最高で大変でしょうと思いま  
す。こちらは気持ちのよい暖かさで、今このレタ  
ーを裏庭の木陰で寝転んで書いています。

J.さん一家が旅行に出掛けた後、気が  
抜けてがっかりして毎日静養していました。一緒  
に暮らしてくれているアイリンという人がとても落  
ち着いた気持ちのいい人なので、私はゆったりと  
全然煩わされることもなく暮らしています。庭の  
花に水を遣ったり、猫と金魚と熱帯魚に餌をや  
るのが日課です。アイリンが番犬にと連れてきた

コリー犬はホームシックになったため、自宅に連  
れて帰ることになり、それからアイリンのボーイフレ  
ンドが‘番犬’代わりに時折泊まってくれます。や  
っぱり男の人はよく食べるので、犬よりも世話が  
大変ですが、Mrs.J.夫人も認めている人ですし、  
アイリンも私とばかりじゃ可哀想ですし、気持ち  
よく彼を迎えてあげています。

実はこの頃、午後には張り切って電  
話帳で調べてはあっちこっち施設見学に出掛け  
ています。自分の今に何が可能なのかを下調  
べに歩いているわけです。やっぱり専門家として  
まともなポストを得るのはまだ時期尚早かもしれ  
ないといった感触です。随分疲れるけれど、いろ  
んな人と逢って話しをするうちにいろんなことを学  
びますし。面白い経験が盛りだくさんです。だん  
だん英国という国が解りかけてきました。まったく  
留学などと簡単に来ている人など、一年やそこ  
らでどれ程学んで帰るものやらと改めて呆れる  
思いがします。それほど他国の暮らしに踏み込  
んで、その奥深さを堪能するには相当の歳月が  
掛かると思われれます。私の場合、ど偉い回り道  
をしているのかも知れませんが、後悔はしていま  
せん。アイリンが、新しい職を見つけるのだったら  
Dr.J.がきつと援助してくれると思うと言いました。  
彼が私をいつかいろんな人に合わせるつもりだと  
言っていたということです。確かに私もそう言われ  
てたのだけど・・。だから全然焦る必要はないの  
です。唯自分のやれることは試みしてみるのが賢  
明ですし、あちこち自分で動きながら見聞きす  
るすべてが将来此の国で携わる心理臨床の舞  
台裏に精通してゆくことであり、新たな知力が  
身に付くというものです。いろんなことがまったく  
い勉強になっていると云えましょう。

では、いずれ近々に又。お体を大切に。  
さようなら 千鶴子より